

マリン周辺の一步先を読む

なるほどINSIDE

[第13回]

青木 洋さんが取り組むヨット指導方法



団塊の世代の受講生が多い青木ヨットスクールでの海上トレーニング風景

「ヨットのベテランが必ずしも良い先生とは限らない」。そんなアンチテーゼを掲げ、受講生の心理にまで踏み込んだカリキュラムを導入し、ヨットの普及に努めているのが、青木ヨットスクールだ。世界一周を成し遂げた青木洋さんが取り組む、インストラクターの指導技術に目を向けた独自の手法とは。従来の指導方法に一石を投じる、ユニークな試みを探った。

文・写真=桑名幸一

ある縁が教える喜びを培い、アメリカで専門教育を受ける

かつてヨットの入門艇としてディンギーが活躍し、初心者向けのヨットスクールが各地で活動していた。基本操作を身に付け、スクールを卒業すると、自分のディンギーを購入し、実践を重ねてさらに技術と知識を向上させていく。このような流れのなかで、ディンギーの愛好者人口は伸びていった。

ところが、最近ではヨットスクールの数がめっきり減少し、かつての勢いはなくなりました。それに呼応するように、ディンギーの販売隻数は低迷を続け、町なかにあったマリンショップも姿を消

して久しい。愛好者人口が減少したからディンギーが衰退したのか、ディンギーの販売低迷が愛好者人口の頭打ちを招いたのか。悪循環は断ち切れないでいる。

カタマラン艇が集まるヨットクラブを経営する鎌倉の古い知り合いから年明けに連絡をもらったが、「乗っているメンバーは、当時の30代がそのまま年を取り、みんなオジサンになっていくよ」と電話口で苦笑していた。その本人も還暦を迎えたと聞き及び、ひとごとながら、この20年を振り返らざるを得なかった。

そのような状況のなか、独自のカリキュラムと考え方を取り入れたスクールを

開き、受講生を増やしているのが、関西国際空港の対岸に位置する田尻漁港(大阪府泉南郡田尻町)を拠点に活動する青木ヨットスクールだ。校長は、1971年から3年2カ月にわたり、長さ6.4メートルの自作ヨット(信天翁二世号)で世界一周を成し遂げ、最小ヨットの記録としてギネスブックに掲載された青木洋さん(57歳)である。

ヨットによる単独世界一周航海という偉業を成し遂げた青木さんが、なぜヨットスクールに身を投じたのか。このような記録を打ち立てると、人間は慢心しがちになり、他人のことにあまり関心を寄せなくなるものだ。しかも初心者への指導となると、自分の経験との落差が大きすぎて、教えるのが厄介になるのではないだろうか。

きっかけとなったのは、一人の人間との出会いだ。13年前、大阪府泉大津市でヨットの販売、整備を行っていた青木さんのもとに、斉藤 寿さんという人物が突然、ヨットの教えるを請いに訪ねてきた。聞けば、ヨットで日本一周を目指しているという。しかし、斉藤さんは当時63歳で、末期がんを患い、心臓にペースメーカーを埋め込み、口も目も不自由な状態だった。青木さんは、どのように教えていいのかわからず一度は断ったものの、奥さんの話を聞いてみたいと、名古屋の斉藤さん宅を後日訪ねた。すると、「主人の最後の願いを聞いてほしい」と懇願され、迷いを捨てて、引き受けることになった。といっても、健常者に教えるようにはいかない。そこで青木さんは、独自のプログラムを作り、それをカードに書いて、筆談でコミュニケーションをとるように努めた。

「斉藤さんの上達は早く、教えることの面白さがわかり、これはライフワークだな、と思いました。でも、ヨットを知っているだけでは無理と思い、世界ではどのようなやり方をしているのか調べてみたい」と、海外に目を向けた。

指導方法を探るために、フランス文部省でヨット教育の担当官に会い、さらにイギリスのRYA(ロイヤル・ヨットイング・アソシエーション)でヨットスクールを紹介してもらった。最後に、アメリカのASA(アメリカン・セーリング・アソシエーション)を訪ねた。

「知識と技術のレベルに応じて資格認定するASAが適していると判断し、世界一周している経験から、上級コースを狙ったら、断られました。初級コースから始めるようにと諭され、逆にそれは面白そうだと思い、じゃ、のぞいてみようかな」と決心した。

いまから11年前、青木さんが46歳のときだった。

斉藤さんは、周りから温かい支援を受け、念願のヨットを購入したが、青木さんがアメリカへ行く1年前に、残念ながら亡くなってしまった。「斉藤さんに出会わなかったら、ヨットスクールは始めていなかったでしょうね」

受講生の不安をまず理解し、それに共感する気持ちが大切

青木さんは単身、サンフランシスコのあるヨットクラブで開かれたASAの養成コースに入り、さらにインストラクター資格を取るためにIQC(インストラクター・クオリフィケーション・クリニック)を受講した。

「世界一周し、ギネスブックにも載っている、そんなことは役に立たなかった」と振り返る。青木さんの言葉によれば、14人の受講生で構成されるIQCの授業は、一人一人にテーマが与えられ、それをほかの13人の受講生に教えるやり方を5日間にわたり、繰り返す。テーマは講習の最後に与えられ、その日のうちにプログラムを自分で考え、それにふさわしい教材を作り、翌日の発表に備えなくて

はならない。慣れない英語での授業は、想像以上の苦労があったに違いない。

「その一人の教え方を13人が評価するんです。ヨットはサイエンス教育ではなく、アート教育だと教わりました。サイエンスの答えはひとつですが、アートの答えはいろいろあります。それをほかの受講生にわかりやすく教えるのはなりません。『声が小さい』、『最初のアイコンタクトがない』などと厳しく評価され、途中でやめる人も出て、最後は8人しか残りませんでした。第三者の目を通して自分を見ることの大切さを学びました」

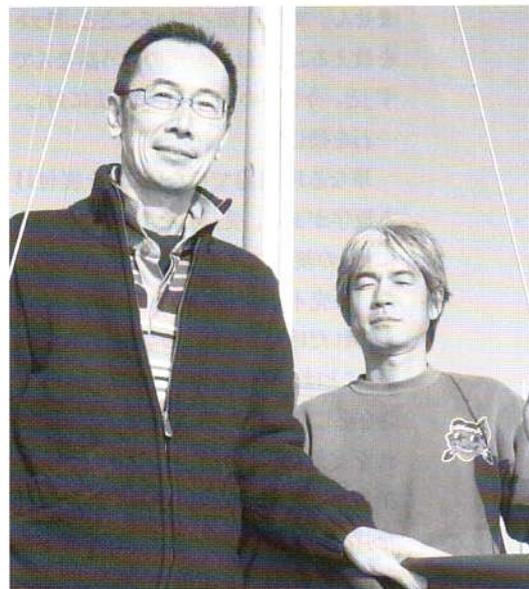
帰国して3年後の2000年4月に、ヨット販売のかたわら、田尻漁港の一角を借りて、青木ヨットスクールを開校した。

一方、インストラクターをたくさん育てないとヨットは普及しないと考えた青木さんは、IQCの講習を開くことができる「インストラクター・エバリュエーター」の資格を取得するために再び渡米。2003年に、アメリカ人以外では初のエバリュエーター資格を持つ外国人となった。

ASAの認定校として開校した青木ヨットスクールは、わずか4人の受講生でスタートしたが、いまでは700人を超える卒業生を輩出するほどに成長した。国内のヨットスクールでは異例の数である。

受講内容は、ASAのカリキュラムに準じ、初心者向けのSB(セーフ・ボートイング)、クルーザーヨット経験者向けのBKB(ベーシック・キールポート)、航海術を習得するCON(コースタル・ナビゲーション)、レベルアップを図るBCC(ベーシック・コースタルクルージング)、クルージング計画の立案と航海術を習得する上級のBBC(ベアポート・チャーターリング)、沖縄の離島間を長距離航海する最上級のACC(アドバンスト・コースタルクルージング)などのコースが用意されている。修了した受講生には、コースに応じたASAの資格が授与される。この資格があると、世界のチャーターヨットの操船が認められるという。

ところで、受講生は、40代から50代が7割を占め、特に団塊の世代が目立つ。



上:校長の青木 洋さん(左)と、卒業生の渡辺 正さん。渡辺さんは、ASAのインストラクター資格を昨年取得し、石垣島でヨットスクール(石垣校)を夏頃に開校する

下:大阪府吹田市の万博公園に展示されている〈信天翁二世号〉。青木さんが22歳のときに、堺市の石津港から東回りで世界一周に旅立った、長さ6.4メートルの合板製ヨット

「団塊世代のビギナーは、三つの不安を持っています。まず怖いという感覚。次に、ビギナーだから、みんなについていけないのではないかと。そして、海に落ちておぼれてしまうのでは、という危惧を抱いているんです。だから、インストラクターはまず、そのような不安に対し、共感しないといけない。自分も最初は同じだったと伝え、安心させる。相手は社会的な経験を積んでいるから、ヨットは安全だと言いくるめても、そうでないことを知っています。危険であることを教えながら、安全を確保する技術を教える。つまり、インストラクターは、受講生の心理を理解する能力が必要なんです。今までのスクールは、インストラクターの指導能力を無視してきました。何も知らない初心者に向かって怒鳴る教え方では、

受講生は腰が引けてしまい、続けられません。ヨットを知っていることと、ヨットを教えることは、次元の違う話なんです」と、今までのヨット指導方法に対し、一石を投じた。

単なる理想論ではないことを裏付ける数字がある。受講した卒業生は、5人に1人の割合でヨットを購入していることだ。販売不振が続くヨットだが、スクールがこれだけビジネスにつながっているということは、卒業生の多くがヨットの楽しさを感じ取ったからにはほかならない。それを支えているのが、インストラクターの指導能力なのである。ASA認定資格を持つインストラクターは現在21人が育ち、指導の輪が広がりつつある。

言葉を選びながら平易に話す、青木さんの温厚な人柄が人をひきつけるのかもしれない。「世界一周したから大胆だと見られがちですが、あれこれ考える慎重なタイプ。だけど、結論を出すと、簡単には引き下がらない」と自己分析する。内面の厳しさを抑制しているのは、間違いないだろうが。

シーマンシップとは本来、安全に操船する技術

高校3年のときにディンギーを自作して、自己流で操船技術を習得した青木さんは、「我流で2年かかることを、2日



左:田尻校で使われる、23フィートのスクール艇。ほかの教室でも25フィート前後のヨットが使用されている
右:青木 洋さんが取得した、ASA発行の「インストラクター・エバリュエーター」の資格認定証。インストラクターを養成するIQCを開くことができる資格だ



間のプログラムで追いつく」ことを標榜している。

「ヨットを始めた18歳の自分は自己流で試行錯誤する時間がありましたが、いまヨットを始める人は50代が多い。それに10年も20年も費やすのはもったいない。受講生のなかには、4日間のトレーニングで沖縄へ行った人もいるし、14日間のトレーニングで太平洋を横断した人もいます。その人が何を求めているかを把握し、必要な基本技術を教えるのが重要です。基本を知っていれば、それを応用し、レベルアップできます。シーマンシップという言葉は精神的な意味合いに使われていますが、本来は、船を安全に操船、管理するための技術を指す言葉です」

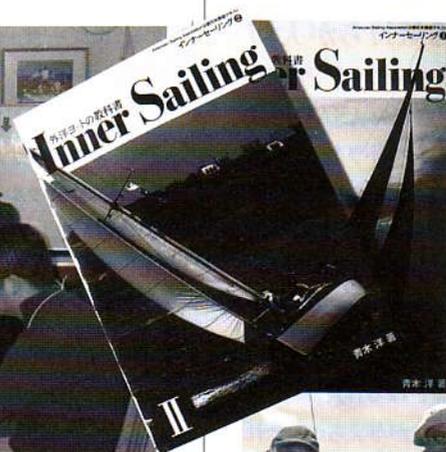


田尻漁港の一角を借りて造られた、青木ヨットスクールの事務所(2階)。座学講習を行う教室もある

受講生の不安を取り除き、インストラクターに必要な能力の向上を目指す考え方は、初心者の受講生に受け入れられた。また、その指導方法は各地に伝わり、田尻を本校に、沖縄県の糸満、神奈川県横浜と横須賀、兵庫県の芦屋と淡路島、岡山県の牛窓に分校が設立されるまでになった。



座学講習は、1クラス5人前後で行われる。国内からのほか、韓国セーリング連盟の役員も受講し、IQCの資格を取得したこともある



上:青木さんが著した、教科書に使われている「インナーセーリング、II」(舵社刊)。イラストを使い、初心者にもわかりやすく解説してある
下:海上トレーニング。受講生の不安をまず取り除き、目標とするレベルに応じた、実践的なカリキュラムが組まれている



卒業生の渡辺 正さん(47歳)も、青木さんの指導方法に共感する一人だ。東京でテレビ番組の制作に従事し、その後、沖縄で薬局チェーンの統括マネージャーに転職した渡辺さんは、仕事の先輩との酒席でジョン万次郎の話に盛り上がり、ヨット購入を思い立った。すぐさま30フィートの中古ヨットを愛知県のディーラーから買い、そのまま単独で故郷の沖縄に帰ろうと、2004年7月に長距離航海に旅立った。

「1級ボート免許を持っていたので、帆走できなくても機走すれば大丈夫だと思っていました。ところが、台風が14個も通り過ぎる荒天を体験し、走った日数は3週間ほどでしたが、避難していた分を入れると実質3か月かかりました。なんとか無事に沖縄に到着したものの、航海を振り返ると、あまりに怖い体験からヨットに乗れなくなってしまい、それを克服するために、青木さんのスクールに入りました」と明かしてくれた。

一昨年1月に、横浜校に入り、SBとBKBの両コースを受講。「初心者にとって、ヨットの世界は敷居が高く感じる。青木さんのスクールに入って印象深かったことは、シーマンシップの解釈です。一般的には、精神面ととられがちですが、確かな技術を指すもので、恐怖心を克服する手段の一つ。それを身に付けていくのはすばらしい」と、ヨットの魅力をあらためて見いだした。

昨年、インストラクターの資格を取った渡辺さんは、青木さんの協力のもと、石垣校(沖縄県石垣市)の開校に向けて準備に追われている。

堺市の私立高校の授業で ディンギーの製作を指導

青木さんは活動のひとつとして、大阪府堺市の私立高校で、ディンギーの製作を生徒に教える授業を受け持っている。今年で4年目を迎えるが、100人を超える生徒が参加し、製作したディンギー(11フィート)は5隻を数える。

「最初は、学校の問題児が多く、大工道具も持ったことのない生徒たちでし



た。どうなるか不安でしたが、ベニヤ板を張り、船の形になりはじめると、黙っていてもみんな教室に集まり、熱心に作業に取り組むようになりました。卒業式に、完成したディンギーが体育館で発表される場面では、みんながヒーローになるんです。すばらしいですよ。田尻漁港で進水式を行ったとき、生徒を乗せたスクールバスのなかで、『うちの生徒がバスのなかで本を読む姿を初めて見た』と引率の先生を驚かせたようです」というエピソードも。生活態度が変わった子供が、いったい何をしているのかと、進水式をのぞきにきた親もいたという。

教える楽しさとは? 「教えているつもりが、実は教えられています。たとえば、失敗したとき、なぜ失敗したのか、考えさせられる。自分のレベルアップにつながります」と、青木さんは謙虚な姿勢を崩さず、温かい目で見守る。

高校3年のときにディンギーを自作した青木さんだが、その当時、受験勉強に落ちこぼれていた。不登校になり、繁華街をうろつく生活のなかで、友人の兄がディンギーを自作しているのを知り、自分にもできるだろうと、13フィートのFC(フライングキャット)級を夏から作りはじめ、卒業式の2日前に完成させた。教科書の代わりにヨットの工作本をむさぼり読み、高校生活は急にバラ色になったが、卒業後は、進学も就職もしないまま、大阪



上:堺市の私立高校でのディンギー製作の授業。初年度は30人でスタートしたが、今では100人を超える生徒が参加している

下:完成したディンギーの進水式でのセーリングの実技。青木さんから基本を学んだ生徒たちが、わかるがわるの操船を体験する

湾でセーリングに明け暮れた。ディンギー製作の授業を受け持ったのも、かつての自分の姿をそこに重ね、すこしばかり反省をこめながら、生徒たちの役に立ちたい、と考えたからかもしれない。

高校卒業後、セーリングに没頭しているうちに、もっと遠くへ行きたいと夢を膨らませた青木さんは、世界一周航海を思い立つと、その資金稼ぎのために、週3日、父親の経営する工場でアルバイトし、残りの時間は〈信天翁二世号〉の建造に充て、準備に2年半をかけた。

「金の支援はできない、人に迷惑をかけるなど、親は反対せずに送り出してくれました。いま21歳と19歳の2人の息子がいますが、ヨットで世界一周すると言い出したら、そんなバカなことはするなど、絶対反対します。危険だから」

ヨットスクールの校長を離れ、親の顔を見せた。